

研究・調査プロジェクト報告

## 東日本大震災

——津波との闘い1——

石原 顕正

### 三・一一という日

平成二十三年三月十一日、前日に母の三回忌を内輪で済ませ、穏やかなひと時を過ごしていた。緊急地震速報が流れたのかどうか判らないまま、突然の横揺れが始まった。ゆっくりと長く続く揺れ、テレビが倒れそうだ。避難経路を確保するために玄関を開けると、目の前に築七百年の旧本堂（県指定文化財）が土台から離れ大きく左右に揺れていた。「このまま倒れるかもしれない！」啞然として身動きもできずに注視していると、しばらくして地震の揺れは収まり、旧本堂もみごとに元の土台に収まった。

### 三・一一東日本大震災発生

—地球の身震いひとつで、人間の営為が無残にも破壊された

まるで夢の出来事のような犠牲を前に、私たちはただ言葉を失い

瞑目し、嘆き、茫然とたたずむほかはありませんでした—

『震源は東北沖、津波被害に注意』その程度の情報しかなかった。この後、広範囲にわたり太平洋沿岸部が巨大津波に襲われ、原発までも破壊されることになるとは、まさかの出来事であった。各テレビ局も情報が錯綜し「津波警報」のテロップが映像の下に出る程度の注意喚起であった。その頃、首都圏は震度5強の揺れに、ほぼ全面的に交通機関が止まり、帰宅する人々で街の中は溢れかえり、帰宅困難者は実に首都圏で推計五百十五万人にのぼった。

直ちに関係者へ情報収集を依頼し、震度6以上の該当地域の寺院への安否確認を試みるが、通信が途絶し状況がつかめない。次第に問い合わせの電話やメールが殺到してその対応に追われながら、いずれ初期調査のため現地に向かうことも考慮し、装備品のチェックと関係者とのスケジュール調整をはじめていた。

そんな中、一通の電話が鳴った。それは十年來の友人である二胡演奏家、程農化氏のプロデュースをしている方からの電話だった。

三月十三日、日本側の派遣要請を待たずに台湾から成田に到着した台湾N G Oレスキュー隊三十五名（含む医師）が足止め状態にあり、大型バス二台で緊急避難的に台湾寺院東京佛光山寺に留まっている、との内容だった。

紹介された日台交流協会渉外担当小笠原弘晃顧問は、

「台湾から人道支援のため緊急来日した民間レスキュー隊です」

「一刻も早く現地向かい救助活動を行いたい。なんとか受け入れて欲しい」との依頼。

「公的機関はじめ、政治的にも八方手をつくしたが受け入れがありません」

「人道支援ですね」

「わかりました。なんとかしましょう」と受け入れを承諾したものの、

『自分は何を言っているんだ。台湾の民間レスキュー隊？ 誰？ なぜアースに？』

突然の依頼に、面識もない相手に通行許可書を発行して責任が取れるのだろうか。日本国が受け入れない海外から

の支援を一介のNPOが現地へ連れて行ってどうすればいいのか。不安は募るばかりだったが、

「これは国際交流、人道支援」なのだと言いながら、警察、役所をまわり通行許可の申請に翻弄する。

ーとはいえ、いったいどこに向かうのか。

当然、通行許可証の申請、審査、発行には必ず目的地を記載しなければならぬ。申請窓口で行き先の特定に困惑していた時、ニュースの映像で津波に襲われる大船渡の様子が記憶として残っていたこともあり、目的地の欄に「岩手県大船渡市」と、迷わず記載した。

大船渡といえは唯一本宗寺院である本増寺があり、木村勝行住職とは旧知の仲とはいえ、寺の被災状況どころか、木村師の安否確認もできないまま、台湾からの救援者たちに行行し大船渡を目指す事になった。

## 搜索から遺体収容、祈りへ

地震発生から津波に襲われる「大船渡の映像」。人間の営みすべてを飲み込んでいく自然の猛威。

まったく現地の状況がつかめないまま、台湾NGOレスキュー隊―中華民国搜救總隊―三十五名を伴って東京佛光山寺を出発。内心、不安を感じながら、雪の降る東北道を北に向かった。

東京から通訳の女性が同乗しているとはいえ、解読できない言葉が飛び交うバスの中で、ふと、遠い記憶がよみがえってきた。

「あの時もそうだった」。

十七年前、阪神・淡路大震災発生時に、思い立って野次馬のように神戸に向かい、自分自身の無力さを痛感した。連日流れるテレビの映像と現場との現実はあまりにも異なっていた。

懊悩する被災した人々を目の当たりにして多くの悲しみや苦しみをどのように受け止めればいいのか。危機的状況

下で自分には何ができるのか。自問自答する日々が続いた。

何を言っても意味をなさない。すべてが受け入れられない、社会全体が本心を失っていた。

「自分にも何かできることがある。行ってみたい。やってみよう」そう思って現場に足を踏み入れたが、現実目の前で起きていることが受け入れられずに、ただ涙がこぼれ、同時に怒りがこみ上げてきたことを思い出していた。

今回も、自分自身の気持ちの整理もつかないうちに、津波に引き寄せられるように現場に向かうことになった。

一瞬まどろんで、夢であつてくれと思つた、でも心身は正直だ。

余震とも身震いともつかぬ揺れが抜けない。

翌朝四時、ようやく大船渡に到着した。目に映るものすべてが津波の猛威に瓦礫の山と化しうつつすらと雪化粧していた。小高い山の頂にある本増寺を眺めると、ひとすじの煙が見えた。

「ああ、よかつた。お寺は無事だつた」。早朝に台湾NGOレスキュー隊三十五名を同行し、突然の訪問に木村師は内心驚いたことであろうが、快く迎えていただき、直ちに救援隊は準備に取り掛かつた。高台にある境内からの景観は、夜明けと共に眼下に広がる大船渡港や街並みの被害の大きさに誰もが絶句するありさまであつた。

早々に準備を整えたレスキュー隊が、一面瓦礫と化した現場に入り調査を始めると、地元消防署員に声をかけられた。大船渡にはすでにアメリカ、中国をはじめ海外からの救援チームが活動を展開しているため、現地消防指揮所にバスごと移動を求められた。

指揮所に着いたとたん「貴様、何を連れてきたんだ」と、署員は上司と思われる人にいきなり怒鳴られた。

「かつてなことをするな」と、一方的に語気を荒げるが、何を言っているのか理解できない。

どうやら、こちらの推測では、私たちと出会ったこの署員は、中国派遣隊と勘違いして台湾レスキュー隊に声をかけ、指揮所に案内してしまったようである。

台湾レスキュー隊の呂隊長はじめ隊員には日本語が理解できないため、通訳の女性が一生懸命に話しかけるが意味をなさない。

私が、相手に身分を尋ねると、彼は「外務省職員」と名乗った。

「自分たちは中国本土ではなく、中華民国・台湾からのレスキュー隊であり、政府派遣とは異なるNGO民間派遣である」との説明をすると、態度が急変し、その職員はその場から立ち去ってしまった。

突然の台湾からの派遣に、公的な立場としてどう対処してよいのか戸惑っていたようである。

台湾レスキュー隊と地元消防団が搜索地域として割り振られた場所は、大船渡港の奥に迫り、足元に加工用魚が散乱し、容易に水産加工会社が点在していたと思われる場所だった。みぞれ混じりの最悪な天候の中、台湾レスキュー隊の現場拠点の設営がはじまり、生命探測機、水深探知機、ソナー、衛星電話等最新装備を中心に生存者の救出に必要な装備品と同時に、屍袋―遺体袋など遺体収容に向けた装備が目をひいた。暖をとる休息所もなく、食事といえど各自台湾から携行しているお粥の缶詰をすすり、呂隊長の細部にわたる指示の元、各隊員は倒壊した工場や散乱する車両、流木の中に入り慎重に搜索が始まった。

突然、「遺体発見」の一報にレスキュー隊の行動が慌しくなり、遺体収容衣を被着した隊員が屍袋に遺体を収容しスノーボードで現場指揮所に戻って来た。「まさか自分の目の前に遺体だ」。緊張しながら搜索に関わった人々と「一刻も早く身元が判明し、家族の元に戻れる」ことを願ひ、読経回向を捧げ遺体安置所に送還した。

僧侶として日常、人の死に接することは多々あっても、被災地で行方不明者の搜索に立会い、生存への僅かな望みも残されている中、津波にさらわれた瓦礫の中からご遺体が発見されることを予期できるほどの余裕はなかった。

神戸以来、被災地で僧侶として読経回向することはめずらしいことではなかったが……。現実には遺体収容に直面し津波の恐ろしさに「死」を確信させられることになった。

## 人と人のネットワークをめざして

今思えば、今回の震災は、被害があまりにも甚大で広範囲に及び、現地の状況はライフラインや各通信機能が途絶したため、詳細かつ正確な情報を得ることは容易ではなかった。そのためできる限り多くの現場をまわり、被災者の方々と直接接して詳細にわたる情報収集に奔走した。

さらに、十六年前の阪神の時代とは異なり、メディアによる災害報道に加え、携帯電話・インターネットの驚異的な普及によりツイッターや動画サイトの利用が盛んになり、ネット上の世間はまるで祭りのような高揚感にとらわれ、延々と多種多様な「災害情報」が拡散され続けた。

その多くは大津波に驚き、その視座にずれが生じていたが、私たちは津波と対峙するのではなく人間重視。まず、被災地の人々に「寄り添う」ことよって、どれだけ相手の悲しみや痛みを理解し、相手に応えられるのか、行政等の手が回らない地域、あるいはメディア報道などからこぼれ落ちていく人々との出会いの中で、子どもたちに希望を与え、着の身着のまま逃げた人々の生活を支えることが急務と判断し、まず、精神的心配り、支えになる行動に繋げていくことを目指した。

とりあえず現場からあがってくる必要な要求に可能な限り応え、その都度必要な物資や資材の提供を新聞・ラジオなど報道関係を通して広く社会に救済を求めた。

全国各寺院・個人・全国日青・女性教師の会・管区寺庭婦人会・ロータスカフェ・全日本仏教会等から多くのご支援を頂き、九州教区からは、被災地支援に役立てて欲しいと「旧伝道車」の提供も受けた。

現実には被害の大きさや情報も乏しい状況であり、当初から、支援メニューが絞りきれないことを訴え、多くの皆様の善意を、「必要な時に、必要な物を購入するための支援金」としてご理解の上提供していただきました。これによって従来「募金はするが、気持ちは添えられない」という、むなしさを感じていた多くの皆様が、どこかに委託するのではなく、アースのネットワークによって、直接支援活動に参加しているという実感を持って頂くことができたのではないだろうか。

こうして東日本大震災とのかかわりは、当初、予想外の「台湾来日」に驚いたが、阪神以来十六年間の活動の中で培われたさまざまな人とのつながり、信頼の絆が緊急時においてまた新たな縁を結ぶことになり、ネットワークの真価が問われることになった。

資料―

※「中華民国搜救總隊」は一九八一年発足以来、民間人の志願により組織されたNGO（非政府組織）。台湾および国際的的重大災害時に緊急援助を行うスペシャリストである。その活動の基本となる信念として、あらゆる国家を対象に政治的、経済的、軍事的などいかなる立場にも左右されず、自主性を保ちながら人道支援に基づきその任務を遂行する。

※一九九九年九月二十一日、台湾大地震が発生し大きな被害を出した。この事態に日本からの支援として、阪神・淡路大震災で使用した仮設住宅約千戸を提供し、十月十六日には最初の住宅が完成した。さらに日本からの救助隊は地震当日台湾入りし、各国の中で最も早く、派遣された隊員規模百四十五名は最大規模だった。前総統（当時総統）李登輝氏は今回の東日本大震災に際し、支援について次のように述べている。

「今回の震災は私たちが恩返しをする番だと考えた。しかし交流協会台北事務所（大使館の役割）を通したレスキュー隊（中華民国捜救總隊）派遣の意思に対し、残念ながら受入れの返答が得られなかったのである。だが、我が台湾レスキュー隊は日本政府の対応を待たず、総勢三十五名が自主的に出発。日本のNPO法人協力のもと、中国と同じ十三日に到着し、岩手で救援活動を行った。少しは恩返しができたであろうか」。

以来、アースは東京佛光山寺を通じて、台湾NGO国際佛光会より多くの物資の提供を受け各被災地に送り届けた。その背景に現代の台湾仏教は、経済の発展に加え政治的にも自由が増大した一九八〇年代頃より、宗教性中心の伝統的な大乘仏教から、人間性を重視した、社会奉仕・教育・医療などの社会活動に力を注いだ新仏教諸派の登場により台湾の仏教徒数は急激に増加の傾向を辿った。こうして台湾社会での人々の慈善・救済活動がとて盛んとなり、東日本大震災への義援金は世界各国の中で最も多い二百億円を越えた。

### 「婚活や絆婚が急増！」

震災は、被災地に大きな被害を与えただけでなく、節電や原発への意識の高まりなど直接被災していない多くの人々の生活にも多大な影響をもたらした。震災がきっかけで相手との絆を再認識した絆婚や結婚への意識が強くなり「絆」を求めて婚活をする独身女性が増えた。

『もしも、また大地震が起きて自分が被災したらどうしよう』大きな余震を含む地震の揺れや震災（特に津波）で受けた「死」に対する恐怖、身近に親しい人のいない心細さを実感した人も多いはずである。

それは私たちを含め、多くの人々が自然の猛威に為すすべもなく巻き込まれ、親も子も連れ合いの命が一瞬にして

失なわれた事実を目の当たりにして、強い喪失感と悲しみが「生きる」ことさえ空しく感じさせたのであろう。

さらには、被災地支援をはじめ原発事故、風評被害などに対する行政的対策の遅れへの不満、震災の影響による企業の倒産や経営悪化による雇用不安等により、今まで抱いていた国や会社への信頼感の喪失とも言われている。

このような理由から、故郷を離れていた人々が家族や身内を心配したり、身近に頼れる存在、安心できる環境を求めて家庭、家族の絆を強く意識する傾向がみられたのであろう。

震災を契機に、お互いに日頃疎遠だった人間関係、特に親族のつながりについて関心を抱き、思いをはせる人が多くみられた。社会全体でも、他者への関心を持つようになり「誰かのためになることをしたい」という気持ちや、「何か役に立つ人間になりたい」という意識が多くみられるようになったことは、今回の震災による大きな教訓であり、「無縁社会」解消への糸口になるよう願っている。

## 「津波でんでんこ」

三陸地方は津波の常襲地とされる。過去の幾多の犠牲と引き換えにつくられた様々な手だても、自然の猛威に破られた。天変地異の脅威をあらためて思う。日本列島はプレートのおつかり合う上に乗る。

その危うさを物理学者の寺田寅彦は、

「国土全体が一つのつり橋の上にかかっているようなもの」とたとえた。

「つり橋の鋼索が、あすにも断たれるかもしれない」と警鐘をならした。

—その鋼索が、切れた。マグニチュード9の巨大地震と、巨大津波の発生。長い災害の歴史が、日本という国の地力を試しているとも思える。

『読売新聞』三月二十八日 「てんでんこ」三陸の知恵、子供たちを救う

東日本巨大地震による津波で大きな被害を受けた岩手県釜石市と大船渡市で、津波に備えた知恵や工夫が奏功し、多くの子供たちの命が救われた。釜石市では、津波から身を守る方法として三陸地方に伝わる「津波てんでんこ」が効果を発揮。大船渡市では、学校から高台へ素早く逃げられるよう、父母らの訴えで昨年秋に完成したばかりのステップでの脱出劇があった。

死者・行方不明者が千二百人以上に上った釜石市では、全小中学生約二千九百人のうち、地震があった三月十一日に早退や病欠をした五人の死亡が確認された。しかし、それ以外の児童・生徒については、ほぼ全員の無事が確認された。

市は二〇〇五年から専門家を招いて子供たちへの防災教育に力を入れており、その一つが「てんでんこ」だった。度々津波に襲われた苦い歴史から生まれた言葉で、「津波の時は親子であっても構うな。一人ひとりがてんでんばらばらになっても早く高台へ行け」という意味を持つ。

学期末の短縮授業で一八四人の全校児童のうち約八割が下校していた市立釜石小。山側を除くほとんどの学区が津波にのまれたが、児童全員が無事だった。学校近くの住宅街で友人と遊んでいた同小六年は「家族や家が心配だったけど、無意識に高い方に走って逃げた」。その後、避難所で家族と再会できた。

反面、宮城県石巻市では、避難誘導に不備があり児童七四人と教職員十名が死亡・不明となった。「最も安全であるべき学校管理下で児童が被災し、津波に対する危険意識を高めておくべきだったと悔やまれる」と関係者は謝罪する。まさに人災の感が深まる事例となった。

「てんでんこ」とは「てんでんばらばらに」という意味。

「津波でんでんこ」とは津波が来たら他者にかまわず、それぞれに必死に逃げろという教えである。

津波のときだけは、「でんでんばらばら」。親子といえども人を頼りにせず、子どもは一目散に走って逃げろ。そして一家全滅、共倒れになることを防げ、というのが三陸地方の津波から生き延びる知恵だという。同時に、「でんでんこでやろう」ということは最初から、それぞれ家族同士がその意味を理解し、お互いが認め合っているという意味合いもあり、津波の時は人にかまわず逃げろ、自分だけ助かってもそれは非難されることではないという。それだけ津波の避難は考える暇すら与えないほどに厳しいものだということを教えている。

「津波でんでんこ」「命でんでんこ」を防災への教訓として解釈すると、それぞれ「津波が来たら、取るものも取らず、親兄弟肉親にも構わずに、各自でんでんばらばらに一人で高台へと逃げろ」「自分の命は自分で守る」という厳しい現実を目の当たりに実感することとなった。

## 防災力を考える

今や日本は災害列島と表現されるように、いつ、どこで、何が起きても不思議ではない事態である。これまでの前例や規模をはるかに超える自然の猛威は、人間社会にとって現実に大きな脅威であり、さらに首都直下型地震をはじめ巨大地震発生への懸念は社会不安となっている。東日本大震災から一年、私たち自身も従来の認識を改め、各自防災力を高めることが急務になってきたのではないだろうか。

「津波でんでんこ」が津波から避難する鉄則とはいえ、人間の本能として親が子を、子が親を助けようとする事例が多く見られた。実際に過去の津波でも、動けない家族をおいていくことができず、一家全滅になった例や、親戚や知り合いに避難を促そうと回り道をして助からなかった人が少なくない。

今回の津波でも「災害弱者」の避難と安全確保の問題は今後に大きな課題を残した。

亡くなられた方のうち六十歳以上の比率は六十四・四％であり、東北三県沿岸市町村の同比率三十・六％の二倍以上になっている。六十歳代、七十歳代、八十歳以上の比率は、人口比率の一・四倍、二・三倍となり高齢者ほど死亡率が高くなっている。これは津波災害から逃れたりする困難性が加齢により大きく影響を受けた様子が見られる。また、地震発生日時が金曜日の午後であり、同居家族が自宅に居なかったことも大きな要因となったと考えられる。同じ年齢階級で男女を比較すると男性の死亡率が高く、車中で溺死したり、数波にわたる津波の間に自宅等に戻った男性が多く見られた。さらに女性を優先して逃れさせた様子もうかがえる。

かつて神戸の事例にもあったように、津波の現場においても、せつかく助かった命なのに、生き残った人々にとつては、多くの犠牲を考えると、自分だけ助かったことが大きな心の痛手となっているケースが見られ精神的ケアの必要性が求められた。

一方、阪神以来行政を中心とする防災体制の見直し、最新の支援システム等が進められているとはいえ、肝心な市民の防災意識は一時的なものといえる。これは防災体制を主として担ってきた関係者と一般市民との間に厳然として横たわっている災害に対する意識の違いや認識のずれが原因の一部と考えられる。

これまで、防災対策を担ってきた関係者たちの様々な研究の成果や警告は、市民社会の中であまりリアリティをもつものとして受け止められなかった。こうした構図から防災対策が専門家集団による研究領域に委ねられる傾向が強く、このため社会の中で危険要因に対する関心が継続的に深まっていかない最大の原因と考えられる。

情報公開による、社会の反応への複雑さを懸念し、あえて公開を控え危険意識の発達を阻害してきた。こうして、たとえ大災害を目の当たりにしても「それは他人事」として捉える傾向が強く、身近なこととして捉えられずに、相変わらず災害が被災関係者以外の人々の記憶から薄れていくことになる。

これからも「自分の命は自分で守る」という考え方を基本とした「地域は自分たちで守る」という防災思想の実践

が不可欠となり、「被害を最小限に食い止める」減災への地道な努力は続けなければならないのである。

## 「喪と復興」の作業

一九九五年の阪神・淡路大震災発生から一年目、私は、神戸市中央区ポートアイランド・第三仮設住宅で自治会長の安田さんと仲間の人々と仮設の集会所にささやかな祭壇を設け、はじめて慰霊祭を営んだ。亡くなった仲間の名前を貼り出し、亡くなられた仲間の数だけ茶碗にご飯を盛り、ローソクも一本ずつ灯した。

「あの人は坊さんだったんや、あの人がよかったらいい」。たとえ宗教、宗旨は違っても仮設のみんなで仲間の冥福を祈った。昼には、震災直後のことを思い出しながら、温かいご飯と味噌汁をみんなで腹いっぱい食べた。

震災当時は、被災地神戸では職業も肩書きも何の意味もなさなかったが、はじめて自分の使命を実感することができた。この仮設住宅で始まった慰霊祭が今日の追悼式への原点となったのである。

こうして被災地の中で、互いの立場や心情を理解できる人物に巡り合う事の重要性。そうした人材に出会うことによって継続した支援が可能になる大きな要素となった。

それからは「支援する側、される側」の立場は解消され、お互いに共に生きるため支え合う関係になった。

神戸では『一・十七』は「慰霊の日」となり私たちチアースは「喪と復興」の両面を担うことになった。

## 二〇〇〇年十一月五日朝日新聞 一・十七手づくり慰霊祭 市民団体「式典は必要」

阪神淡路大震災の仮設住宅で暮らした住民を中心にする「阪神・淡路大震災被災者ネットワーク」（安田秋成代表）など六団体は、震災から九六年となる来年一月十七日に市民慰霊祭を行うことを五日までに決めた。兵庫県が従来の追悼式典の取り止めを発表、神戸市など他の自治体にも式典見直しの動きが広がっているため、住民たちは

「気持ちに区切りをつけるためにも式典は必要」と、独自慰霊祭で犠牲者を追悼する。

同ネットワークは、仮設などでだれにもみとられずに亡くなった人たちを、七回忌となる来年、追悼しようと、県内外の被災者支援団体や非営利組織（NPO）計五団体に呼びかけ、実行委員会を結成して。そこへ県が式典中止を発表したことから追悼対象を犠牲者全体に広げ、県の式典に代わる慰霊祭を目指すことに変更した。

### 十一月五日読売新聞 『様々な死無駄にしません』 一・一七初の市民慰霊祭

震災から丸六年の来年一月十七日に初めて実施する市民慰霊祭で、犠牲者六四〇〇人に加え、仮設住宅や復興住宅で亡くなった人、ボランティアなど救援復興活動中で亡くなった関連の死亡者の名前をできる限り掲示して弔うことを決めた。安田代表は「あの地震にかかわった様々な死を決して無駄にしたくない」としている。

## 神戸希望の鐘

二〇一〇年震災から十五周年を迎え、「神戸・希望の鐘」と命名し、意匠・鑄造半年を経て無事完成、神戸にその音色を届けることができた。

遺族被災関係者の願いはなにより「風化」を防ぐこと。十五年の時の流れは次第に震災を風化し、過去の事実として捉えられようとしていた。震災以来街並みはすっかり塗り替えられ、傷跡も見えにくくなり、神戸を訪れる多くの人々は、かつての被災地を想像することがとても困難になってきた。

一方、元被災者の多くは次第に高齢化し、厳しい現実と向き合って生き続ける力も、訴える言葉も弱くなってきた。希望の鐘にご支援頂いたお上人から「まさに、これこそ立正安国だよ」と励ましの言葉を頂いたが、この「鐘の音」によって、六四三四名殉難諸霊への慰霊はもとより、震災の風化を和らげ、生き残った人々にもそれぞれに希望ある

未来を託すことができたものと確信している。

二〇一二年一月十七日、今年も神戸市内において十七周年阪神・淡路大震災市民追悼のつどいを開催した。今年も東日本大震災後、初の震災忌。東北に連帯の絆を贈ろうと東日本大震災殉難諸霊に対し黙祷を捧げ、「神戸・希望の鐘」が参列者によって撞かれた。

「震災犠牲になられた方はかりではなく、仮設や復興住宅で亡くなった方も孤独死した方も大勢います。私たちがその命を引き継いで生きていくことが大切ではないでしょうか。皆さんの思いを東北に発信してください。三月十一日に大船渡港で開催される『東日本大震災一周年市民鎮魂と追悼のつどい』に届けます」と。苦しみや悲しみに寄り添い神戸市民と結んだ絆を胸に、東北でも被災者の声に耳を傾けていく覚悟を述べた。

## 首都直下型 四年内に七〇パーセント

マグニチュード（M）7級の首都直下地震が今後四年以内に約七〇%の確立で発生するという試算を、東京大学地震研究所の研究チームがまとめた。首都直下を含む南関東の地震の発生確率を「三〇年以内に七〇%程度」としている政府の地震調査研究推進本部の評価に比べ、切迫性の高い予測といえる。首都圏では一九二三年の関東大震災（M8級）のほかに、茨城県南部から浦賀水道にかけてM7級の地震が約百二十年間に五回起きている。首都圏の地震活動の活発化は、東日本大震災によって地殻の動きが変化したためと考えられており、同研究所の平田直教授は「地震活動が活発な状態は数年から一〇年は続くと考えられる。その間にM7級の直下地震が起こる可能性は高い」この発表により、数日ニュースで取り上げられたが、私たちは「怯えることなく、備えることを」考えることが必要ではないだろうか。

今や災害は単純な自然災害に止まらず、将来起こりうる災害は原子力による被爆、新型ウイルスなど感染の脅威も

予想できる。今回の三・一一のように、地震・津波・原発などが巨大複合災害となって起こる可能性も多くなるだろう。まず「どうすれば生き抜くことができるか」。わが身の被害を最小限に食い止めることが肝心であり、これからは遠くの災害ではなく、自分たちの足元で起こるかも知れないことを念頭におかなければならなかった。もしもの場合、冷静に行動することができようか。特に人口が密集する都市部では、犠牲者の数は増えることが予想されている。都会では「津波でんでんこ」以上に、「わが身は自分で守る意識」が生き残る手立てにつながるだろう。在勤、在学など出先の場合、帰宅困難は「帰宅不可能」になり、帰宅しようとする選択をあきらめざるをえない事態にどのように対応するのか。それぞれの日常のライフスタイルを検証することが求められる。行政施設等のキャパシティを大幅に超える帰宅困難者が発生する可能性が高く、今回の地震でも一時避難、帰宅困難者への情報提供体制等に課題を残した。混乱する事態に自助・共助の実践（帰宅沿道でのサポート）や通信の確保、迅速な復旧への積極的な取り組みが急務となる。行政のみならず、鉄道、通信、集客施設などの事業者を従来以上に巻き込んで、社会全体で対策を立て直すことが必要とされ始めた。選択肢の一つとして安全が確保されるまで帰宅を抑制することの徹底、不足している一時待機施設の確保が帰宅困難者の増加を抑えることができるのではないだろうか。

### 菩薩行の実践をめざして

かつて先進国のなかでも、最も安全といわれた神話がいとも簡単に崩れ、政治経済の低迷、人心の荒廃により身内、他人を問わず人間不信は危機的状況である。今や、自分だけが安全な日々を過ごすことが困難になってきた。それだけ日常生活において、不安や危険度が増していることを認識しなければならないのだろう。

言い換えれば「他人の不幸の上の繁栄は、やがて自分自身にも影響が及ぶかもしれない」ということを考えて見る必要があるのではないだろうか。

いずれの被災地においても最初から、被災された人びとの心情を理解するということは困難であり、そのためにはまずわが身に置き換え、自分に何ができて、何ができないかを考えなくてはならない。一時の同情や涙ではなく、被災者との労多いコミュニケーションが求められる。さらには、限界や不可能を乗り越え可能にするための継続した熱意と創意工夫が必要となる。

今回も現地の情報が途絶している中「支援する側、される側」、立場を乗り越える努力は続いた。

こうして東日本大震災の現場においても、さまざまに人間は一人では生きていけないことを学んだ。互いに助け合い支え合って今の自分、命があり、生きていることのありがたさを改めて実感することができた。

被災者にとつて、再建とは元(旧)に戻ることではない。亡くなった家族は絶対に戻らない。立ち直るためには、立ち直るだけの理想が必要である。人と人との絆によって、人間同士や社会への信頼を取り戻すこと。信じられる思いが不可欠となるだろう。私たち救援者が送ることのできる「最高の贈り物」とはそんな思いではないだろうか。

法華経の教えに導かれ、弘教する立場の一人として、こうした状況の中で、同情や哀れみではなく、「真の救済」は、どこにあるのか問い続けた。

今本地の娑婆世界は三災を離れ

四劫を出たる常住の浄土なり……

己心の三千具足三種の世間なり

まさに、惨状(地獄)の中にあつても、仏の世界を見出すことが最大事であつた。

法華経の菩薩の实践は、死者のみならず、強いものや、弱いものでも、小さなものでも、生きとし生けるものたちが幸せであるように、実践していくことを教えている。今回も日常到底体験することのできない現実の世界を体験す

ることができたが、私たちの役目は、一人一人の心の内に「人間の尊厳」を見いだすことで、「変化の人」となり、その実践（手だて）が、法華経、お題目の世界を顕現するものと確信している。

一 宗教者として「現代社会における人々のさまざまな困難や苦しみ」にどのように向き合い、「癒しと救い」の手立てを確立していくのか。「立正安国実現」を掲げる今、これからも「宗教と災害」をテーマに、自分の幸福より他人の幸福を願える人を増やすことを実践していきたい。

二〇一一年三月十一日

マグニチュード9の揺れ

想像をはるかに超えた大津波は

二万に迫るであろう人々の命を一瞬にして奪いました

からくも生き延びた人々も、別れの言葉ひとつ言えずに子どもを、親を、

連れ合いを、友人を失いました

その悲しみはどれほど深く大きかったことでしょう

せめて、私たちはその嘆きと悲しみに寄り添いたいと願うのみであります

いまだに行方のわからない、あきらめきれない多くの悲しみが残る中

この緊急の救援と喪の時間を妨げ、不吉な影を及ぼしているのが

福島第一原子力発電所の深刻な事故です

「絶対に安全」といわれ続けてきた原発は、制御不能になりました

原発災害はなお進行中であり、予断を許しません

しかし、何があるうとも、私たちはこの国で生きていく外ありません

法華経如来寿量品に「衆生劫尽きて 大火に焼かると見るときも

我が此の土は安穩にして天人常に充滿せり」と示されて

この娑婆こそは常寂光土なりと説かれています

あらためて震災受難の人々

犬・猫ペットの霊魂

牛馬家畜

草木生命あるもの全ての精霊の成仏を祈ります

お釈迦様は「生きとし生けるものに平安あれ」と祈られました

生物に対する温かい慰め、癒しの言葉でした

まさに主・師・親の三徳をお備えになられた

久遠の本師釈迦牟尼如来の大慈悲の御心であります

私たちはいつも

遭難者霊位の菩提を祈り

震災以来さまざまな救援や

心あるひとびとの支援、励ましに感謝し

再びこの国土が

イキイキと荘厳されることを念願します

南無妙法蓮華経

東日本大震災殉難諸霊追悼 併せて被災地復興祈願文といたします